

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13099

研究課題名（和文）自然な英語習得を目指した児童への指導方法研究 語彙習得と文法習得から

研究課題名（英文）A study of teaching methods for children through natural English acquisition:  
From vocabulary and grammar acquisition

研究代表者

金山 幸平（Kanayama, Kohei）

北海道教育大学・教育学部・講師

研究者番号：80850081

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：この3年間で児童を対象に様々な英語語彙知識調査を行い、児童がどのような特徴を持つ英単語を知っているか、またはどのような要因が児童の英単語学習を阻害するのかを分析することができた。さらに、研究成果を日本児童英語教育学会紀要、小学校英語教育学会紀要、Vocabulary Learning and Instruction、北海道英語教育学会紀要などのジャーナルに掲載させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果は、小学校英語における語彙指導に大きく貢献することができる。英単語を児童に教える際に、どのような要因に注意をして指導して、どのような英単語に指導時間を割いて、反対にどのような英単語にはあまり多くの時間をかけない方が良いのかが明らかにされたためである。さらに、特定の英単語の特徴から、児童がその英単語を知っている確率を算出する式を提示したことで、多くの教師が活用し、語彙指導に生かされると考えられる。

研究成果の概要（英文）：I have conducted various English vocabulary knowledge surveys of children over the past three years, and have been able to analyze what characteristics of English vocabulary children know and what factors impede their English vocabulary learning. Furthermore, I was able to have my research results published in journals such as JASTEC Journal, JES Journal, Vocabulary Learning and Instruction, and HELES Journal.

研究分野：英語教育学

キーワード：小学校英語 語彙習得 カタカナ英語 音声 意味知識

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

英語を読んだり、書いたり、聞いたり、話すときには必ず語彙知識や文法知識を使用するため、言語学習において語彙学習と文法学習は避けることができない。一方で、小学校英語では、コミュニケーション能力の育成が目標として掲げられている。そのため、知識・技能の習得という側面からも語彙指導や文法指導は必要であると考えている。しかし、小学校英語教育のもう一つの目標は、英語活動に慣れ親しみ、英語嫌いを作ることなく、中学校進学以降も継続して英語学習に取り組む姿勢を育てることでもある。従って、目標を同時に達成するためには、児童にとってより楽しい言語活動を通した語彙習得や文法習得の実現であると考えた。語彙や文法を明示的に学習する行為は、中学校以降は頻繁に見られるが、小学校段階では避けるべきである。このような考えから、言語活動を通した付随的な語彙習得と暗示的な文法知識の習得のための指導方法の提案が急務だと考えられる。以上が本研究の着想の経緯である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、EFL (English as a Foreign Language) の環境で英語を学ぶ日本の児童に対して、英語力の自然な習得を目指した指導方法を、主に語彙習得、文法習得という観点から提案することである。本研究における自然な英語習得とは、明示的に語彙や文法を指導する様な学習体系ではなく、コミュニケーション活動を通して自然に身に付く付随的な語彙知識や暗示的な文法知識を促す指導方法による習得を指す。本研究では、小学校外国語活動、外国語科の授業を観察し、その中でどのような言語活動が行われているのかを調査し、そのような活動の結果、児童が習得した語彙知識、文法知識がどのように定着しているのかを明らかにすることで、コミュニケーションを主軸とした言語指導方法との関連について考察する。具体的には、児童を対象に語彙知識調査をテスト形式で行い、文法知識調査を、児童の会話や発表などを記録し分析するとともに、文法性判断課題テストの結果データの分析を行い、これらから得られる結果を元に効果的な英語指導がどうあるべきかを考察する。以下が主な研究目的である。

目的 1：小学校ではどのような言語活動が実施されているのかを調査すること

目的 2：児童の語彙知識を検証し、効果的な指導方法を提案すること

目的 3：児童の暗示的文法知識を検証し、効果的な指導方法を提案すること

### 3. 研究の方法

小学生を対象に、様々な語彙知識調査を行うことで検証していく。語彙知識調査では、様々な特徴（語の長さ、頻出度、カタカナ語の有無など）を有する語彙を出題することで、どのような語彙の正答率が高いのか、または低いのかを調査する。語彙知識調査では「音声→意味」選択テスト、「意味 音声」選択テスト、「意味 文字」再生テスト、「音声 文字」再生テストなどを行う。

### 4. 研究成果

2020年度は、児童を対象に様々な英語語彙知識テストを実施したことで、外国語活動における語彙知識の習得状況について調査した。調査1では、小学校中学年の児童に対して「音声→意味」選択テスト（英語の音声を聞いて、その意味に合う正しい絵を選ぶテスト）を実施した。そ

の結果、語彙の音素数が少ないほど、語彙の正答率が高くなることが明らかになった。また3年生と4年生で正答率に差がないことが明らかになった。つまり、小学校中学年で導入される英単語は3年生の段階で既に多くの児童によって知られており、1年間の外国語活動では英単語の「音声→意味」知識は大きく伸びないことが示唆された。さらに、テストの正誤パターンから、児童がある特定の英単語を知っている確率を算出する予測モデルを構築した。このモデルによって、児童の「学年」と「音素数」という要因から、ある特定の英単語がどのくらいの割合の児童によって知られているのかが予測可能になった。調査2では、小学校高学年を対象に「音声→文字」再生テスト（英語の音声を聞いて、それに対応する英語の綴りを書くテスト）と「意味→文字」再生テスト（イラストを見て、それに対応する英語の綴りを書くテスト）を実施した。その結果、外国語活動、および外国語における言語活動だけでは文字を書く技能は習得されないことが示唆された。調査3では、小学校高学年を対象に「音声→文字」選択テスト（英語の音声を聞いて、対応する綴りを選択するテスト）と「意味→文字」選択テスト（イラストを見て、対応する綴りを選択するテスト）を実施した。その結果、テストの成績に影響を与えるのは言語活動よりも英単語が持つ特徴（語の長さ、頻出度、カタカナ語の有無など）が大きく影響していることが示唆された。

2021年度は、2020年度に行った調査の結果をまとめて、論文執筆活動を行った。その結果、調査1をまとめた論文は、語彙研究専門の国際誌（Vocabulary Learning and Instruction）に、調査2をまとめた論文は、全国誌（日本児童英語教育学会紀要）に掲載されることになった。国際誌に掲載された論文では、ある英単語の音素数と児童の学年という2つの要因を考慮すれば、どのくらいの割合の児童がその英単語を知っているのかに関して、ある程度精度の高い予測式を提案することができた点が評価された。全国誌に掲載された論文では、英語初学者がどのようなプロセスを経て英単語を習得していくのかに関する提案をした点が評価された。英単語には「音声」「意味」「文字」の3つの素性があり、一度の学習で3つの素性がすべて学習されるわけではない。どのような素性から習得され、そのような習得プロセスを経るのかを発表することができた。2021年度は調査4と調査5も行った。調査4では、小学校中学年の児童を対象に「音声 意味」選択テストを行った。その結果、多くのカタカナ語の特徴を含む英単語、特に食べ物や動物を表す語は英語初学者であっても、正答率が90%を超えることが明らかになった。また、penや「ペン」などのように、英語発音とカタカナ発音の一致度合いがそのまま正答率に反映されることも明らかになった。調査5では、小学校高学年を対象に「音声 意味」選択テストを行った。調査結果は調査4とほぼ同じであるが、それに加えて、調査語彙が児童にとって既習語かどうか非常に大きな要因となる可能性を明らかにした。

最終年度では、これまでに行ってきた、児童を対象にした英語語彙知識調査の結果を学会に発表し、さらに論文にしてジャーナルに投稿した。学会では全国英語教育学会と小学校英語教育学会の全国大会にて発表を行った。また、調査4をまとめた論文が、北海道英語教育学会紀要に、調査5をまとめた論文が、全国誌（小学校英語教育学会紀要）に採択された。これが最終年度の研究成果である。3年間の研究期間を通して、毎年学会発表を欠かさずに行ってきた。2021年度の日本児童英語教育学会の全国大会、2020年度～2022年度の小学校英語教育学会の全国大会、2022年の全国英語教育学会の全国大会でも研究成果を発表している。具体的な研究内容は、本研究は、児童を対象に英語語彙知識調査を行うことで、どのような特徴を持つ英単語が児童にとって習得が容易で、どのような要因が語彙習得を難しくしているのかを検証することが目的であった。調査を通して、カタカナ語の特徴の有無、音素数の多さ、頻出度レベルの高さ、教室内で指導された語彙かどうかの有無などの要因が大きく語彙の習得難易度に関わっていることが

示唆された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kohei KANAYAMA	4. 巻 10
2. 論文標題 Predicting Japanese Primary Schoolchildren's English Vocabulary Knowledge from a Sound-Meaning Recognition Test	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Vocabulary Learning and Instruction	6. 最初と最後の頁 16-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7820/vli.v10.1.kanayama	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 金山 幸平	4. 巻 40
2. 論文標題 児童の英語語彙知識の習得過程 - 多角的語彙習得モデルとの比較 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 JASTEC Journal	6. 最初と最後の頁 35-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 金山 幸平	4. 巻 71
2. 論文標題 絵本の読み聞かせが小学校英語の目標達成に与える影響 - 国内研究を中心にしたレビューから -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 金山 幸平	4. 巻 23
2. 論文標題 小学校高学年の児童が聞いてわかる英単語の特徴とは 「音声 意味」選択テストを通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小学校英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 30-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金山 幸平	4. 巻 22
2. 論文標題 小学校中学年のカタカナ語の特徴を有する英単語の「音声 意味」知識の検証	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道英語教育学会誌	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 金山 幸平
2. 発表標題 児童の英語語彙知識を予測する試み 「音声 意味」認識テストから
3. 学会等名 日本児童英語教育学会 第41回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山 幸平
2. 発表標題 小学校中学年の英語語彙知識を予測するモデル構築
3. 学会等名 小学校英語教育学会 第21回関東・埼玉大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山 幸平
2. 発表標題 日本人児童の英語語彙知識習得過程 - 多角的語彙習得モデルの再考 -
3. 学会等名 小学校英語教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金山 幸平
2. 発表標題 小学校高学年の児童が聞いてわかる英単語の特徴 「音声 意味」選択テストを通して
3. 学会等名 第22回小学校英語教育学会 (JES) 四国・徳島大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金山 幸平
2. 発表標題 小学校中学年のカタカナ語の特徴を有する英単語の「音声 意味」知識の特徴
3. 学会等名 全国英語教育学会第47回北海道研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関